じょーもぴあ宮畑だより 2018 秋号 vol. 27

特　集　：文化の秋　芸術の秋　縄文の秋！……Ｐ２
連　載　：展示案内　⑪……Ｐ３
　　：コラム　縄文の小径　第７回……Ｐ３
　　：福島市の遺跡　第２４回……Ｐ４

編集：じょーもぴあ宮畑だより編集班　発行：じょーもぴあ・遺跡の案内人

丸太ころがし

よさこい（舞鈴光）

太鼓（大壇桜鼓会）

弓矢的あて

エコバッグ作り

縄文４種（柱食い競争）

縄文４種（獲物かつぎ競争）

チアリーディング（クラップスチアリーダーズ福島）

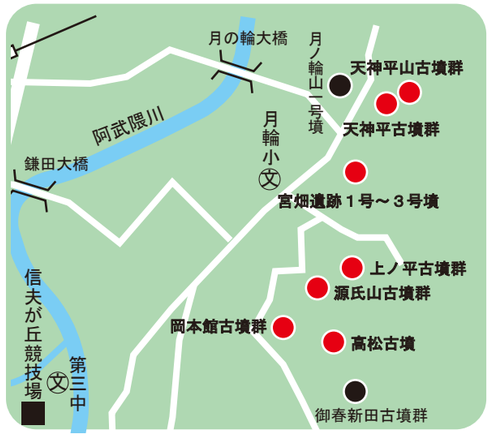
エコバッグ作り

じょーもぴあ宮畑秋まつりはイベントもりだくさん！

９月２２日にはじょーもぴあ宮畑秋まつりが行われました。恒例となった縄リンピックでは弓矢的あて、弓矢一本勝負、じゃんけん競争、トチノミ運び競争と縄文４種競技など熱戦が繰り広げられました。また、今年初めて設けられたアトラクションステージでは、チアリーディングやよさこい、太鼓などが演じられました。

福島市の遺跡 古墳時代編

第24回 岡島地区の古墳（1）



月ノ輪山１号墳（鎌田）の南、福島市岡島地区の丘陵地帯にも、横穴式石室を持った群集墳が数多く発見されています。

宮畑遺跡１号～３号墳（岡島字宮沢）は、じょーもぴあ宮畑の駐車場内にあります。築造は７世紀頃と推定されています。１号墳は直径 18m（周溝を含めると 25m）の円墳、玉石敷きの石室を持ち、ガラス玉が出土しています。現在は駐車場の西端に盛り土をして保存されています。２号墳は直径 11m、３号墳は直径 12m です。これら３基の古墳は、盆地東部の他の古墳が丘陵の頂部や斜面に造られているのに対して、阿武隈川の段丘面に造られているのが特徴です。

上ノ平古墳群（字上ノ平）は、福島工業団地造成に伴い、平成８年、２基の古墳の発掘調査が行われました。ともに円墳で胴張形石室を持ちます。１号墳は、幅１～3m ほどの周溝を含めて直径 15.6m、石室の床面には径２～5 cm の玉石が敷かれています。石室内から土師器や須恵器、鉄製の直刀１本など、周溝底面から直刀１本と馬具（轡）、耳環２点などが発見されています。２号墳は直径 11m、土師器や金属製品のほか、石室の奥壁寄りから耳環が１点発見されています。須恵器や鉄刀、馬具などが発見されることから、上ノ平古墳群も７世紀前半の築造と推定されています。

上記の他にも岡島地区では、同時期と見られる以下の古墳および古墳群が見つかっています。**天神平古墳群**（字天神平）では円墳３基、**天神平山古墳群**（字天神平山）では円墳７基、**高松古墳**（字高松）では円墳、**岡本館古墳群**（字館）では円墳２基がそれぞれ見確認されています。**源氏山古墳群**（字源氏山）では墳丘は確認できませんが、鉄刀・鐔・金環・勾玉・切子玉などが出土しています。

宮畑１号墳の石室の状況。側壁や天井石と考えられる大型の石はすべて崩れており、手前に露出している玉石は石室の床面のものと思われる。

上ノ平古墳群では大小の古墳が並んでいた。向かって右側の大きいほうが１号墳で、左側の小さいほうが２号墳。

編集後記

今年の夏の猛暑には「命にかかわる」という、今までに経験したことの無い恐怖を感じさせられました。また、日本ばかりではなく地球のあちらこちらで地震や台風による豪雨、土砂崩れ、強風等の自然災害が起こっています。

今まで人類が壊してきた自然の反逆が始まったのかと不安に思ってしまいます。１万年以上も前から自然とともに生きてきた縄文人は、どのように自然災害と向き合っていたのでしょうか。縄文土器を見ながら、ふとそんなことを考えてしまいました。（慶子）

文化の秋　芸術の秋　縄文の秋！

じょーもぴあ宮畑ではさまざまな講座やイベントを実施しています。講演会やフィールドワークなど歴史や文化にかかわるイベントと、コンサートや縄文土器づくりなど芸術に関わるものがあります。

７月１日には、明治維新１５０周年を記念して、福島城下を中心に**明治維新の足跡を巡るフィールドワーク**①を実施しました。明治期の福島の教育や経済の興隆の足跡は今でも市街地の片隅に残されており、それらを訪ね歩くことで、現在の福島市を考え　る重要なヒントが得られるのではないでしょうか。

講演会は**オープンカレッジ**として、この秋に２回実施し、１１月に１回を予定しています。９月１６日には山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館から渋谷孝雄館長においでいただき、山形県高畠町の**特別史跡日向洞窟について**お話しいただきました②。昭和３０年代においては、国内随一の資料が出土した日向洞窟と縄文時代草創期研究の進展は切り離せないものであり、日向洞窟の発掘調査が研究に果たした役割の大きさがわかりました。１０月６日には国立歴史民俗博物館から工藤雄一郎准教授をお招きし、**縄文時代の植物利用**と題してご講演をいただきました③。狩猟採集文化と考えられていた縄文時代に植物栽培が行われていたとのお話は興味深く、最新の研究成果がかつての縄文時代のイメージを大きく変えようとしている時期に来ていることが実感できました。

８月６日には昨年に引き続き**ハープ王子**２度目の**エントランスコンサート**を行いました。今回はフルート姫とギターの安生正人氏と３人でのコンサートで、豊かな響きがホールを満たしました④。９月２９日には**新井武士氏とボブ斉藤氏による復興支援コンサート**が行われました⑤。じょーもぴあ宮畑では初めての夜のコンサートであり、落ち着いた雰囲気のなか大人のブルースが　流れる夜になりました。

８月２６日は**縄文土器づくり**。今回はシンプルな造形に挑戦しましたが、単純なだけに逆に難しい部分がありました。製作した土器は１０月１４日にじょーもぴあ宮畑で**野焼き**を行いました⑥が、焼け具合によって部分部分で色味が変わり、表情豊かに仕上がりました。

今年の秋も、頭と心と体を使って楽しんだじょーもぴあ宮畑でした。

じょーもぴあ・遺跡の案内人の縄文展レポート

平成３０年７月３日から９月２日まで、上野の国立博物館では国宝７点を含む縄文時代の逸品をそろえた「縄文展」が開催されました。福島市からはしゃがむ土偶が出展されこともあり、じょーもぴあ・遺跡の案内人の中でも、上野まで見学に行った会員がいるので、その感想をお届けします。

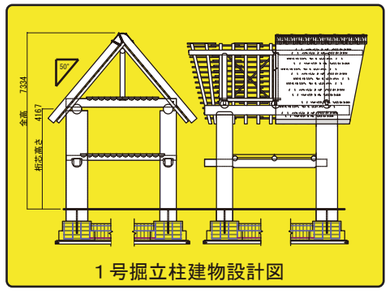
「縄文にはちょっと詳しいよ」という触れ込みで、縄文初体験の友人達を誘って観てきました。友人達も一口に縄文土器と言っても様々な形や表情があるんだということに驚いていました。土器の表現一つとっても地域や時代によって実に様々で、１万年という時間の厚みを感じました。縄文展を訪れるというのは、地域の文化の深さを発見すること、そして文化の多様性と遭遇することなのだなと改めて思いました。（茂）

ほかにも**見慣れたしゃがむ土偶も国立博物館で見ると一味違う**という感想や**縄文時代に興味がある人がこんなにいると思うとうれしくなった**などの感想がありました。

展示案内　⑪

じょーもぴあ宮畑の掘立柱建物は縄文時代晩期に位置づけられるもので、全部で１７棟あること、広場を囲んで環状に分布すること、北側と南側に特に密集することなどが判明しています。また、掘立柱建物の分布する外側からは幼児の墓が見つかっています。このことから、広場を中心に掘立柱建物と幼児の墓が同心円状に展開しているものと考えられ、その規模や配置から掘立柱建物は一般の住居ではなく、子供のお墓に関わる施設と考えられます。

左から１号、２号、５号掘立柱建物



１号掘立柱建物設計図

一番大きな掘立柱建物の柱の直径は９０ｃｍで重さは３ｔを超えます。建設にあたって、柱や垂木など部材にはクリ材を用いました。柱の地上高（４ｍ）は埋められていた深さ（２ｍ）の２倍とし、そこに屋根をかけて全体の高さは約７ｍになりました。高床で壁の無い形なのは、祭祀用の施設と位置付けたためです。

連載コラム　縄文の小径

第七回　定住の始まりは農業によってではなかった？

旧石器時代の人々は、食べ物を求めてしょっちゅう移動していた。狩りをするのはもっぱら男性の仕事。女性は植物の種子や山菜の採集など身近なものを担当していたのだろう。季節ごとに、あるいは食糧の確保が思うようにいかないと分かれば毎日でも移動し、ほとんど何も持たずに自然の恵みを追いかけ、常に自然のなすがままに生きていた。やがて、地球の温暖化によりそのような生活様式から人口１０人ないし２０人の小さな村での定住生活へと変化し、食糧の採集から生産へと移行しはじめた。この遊動的な狩猟採集民社会の旧石器時代から定住社会への移行を、オーストラリア生まれの考古学者ゴードン・チャイルドは**新石器革命**と呼んだ。

場所によっては紀元前一万年ごろから、後の本格的な農耕につながるような植物栽培が始まった。食糧を中心とした労働の結実が顕著になり、生産力が向上した。この生産力の向上にチャイルドは着目した。マルクスやエンゲルスが打ち立てた**史的唯物論**を、人類史の叙述に取り入れようとしたのである。

ところが、社会の変革は農業より前に精神文化に起こったと主張する人が現れた。「ギョベクリ・テペ（遺跡）は最初に社会文化的変化が起こり、その後で農業が始まったことを物語っている」と、スタンフォード大学の考古学者イアン・ホッダーは言う。

何もない台地のまっただ中にギョベクリ・テペは建っている。それは、祖先たちが強い意志を持ってそこを訪れたことを示している。この地域では、水源や住居や火床など、人が住んでいたことを示す証拠は一つも発見されていない。それは集団による**宗教的儀式**が始まったことが重要な原因となって、宗教的中心地の周りに放浪の民が集まって定住はじめ、やがて共通の信仰と価値体系に基づく村が形成されたということだ。

ギョベクリ・テペを建てた古代人は、生活に関する現実的な疑問を問い対応するより先に精神的な疑問を問う段階へと進歩していたらしい。「ギョベクリ・テペが新石器時代の複雑な社会の真の起源だったと言っていいだろう」とホッダーは語っている。

人間以外の動物も、食べ物を得るために単純な問題を解決したり、単純な道具を使ったりする。しかし、たとえ原始的な形であっても人間以外の動物には決して観察されたことがないのが、自身の存在を理解しようとする探究の行為である。例えば、私たちは「何のために生きているのか」と真剣に問う。旧石器時代後期や新石器時代前期の人々が単に生き延びることから視線を逸らし、これまでの日常生活からは不必要なとも思われる真理に目を向けたことは、人間の知能の歴史において最も意味深いステップの一つだった。ギョベクリ・テペが人類最初の、あるいは少なくとも知られている中で**最初の宗教施設**だったとしたら、それは宗教史における神聖な場所に値する。

ギョベクリテペ遺跡　トルコのアナトリア南東部に所在する遺跡で、今から１万２千年～１万年前に作られたと考えられる巨大な石造物群が見つかっている。

ドイツの哲学者ハイデガーは「山も川も木々も動物たちも存在するが人間だけが『存在』の在り方を気にしている唯一の存在者である。〈何事かを成し遂げたい〉と自分の存在を不断に変え、自分の可能性に懸けて行動する」と云っている。この遺跡も経済活動以前の人間固有の存在の特質が具現化されたものといえるのか。

チャイルドは、先史時代を物や文化の推移を跡づけるにとどまっていた考古学会で、初めて生産力の発達という事象で歴史叙述の域にまで高めていったことが高く評価されている。しかし現在の社会は、経済が社会や文化の形を作るのではなく、心や思想が社会や経済のあり方を規定するという考え方が強くなっている。経済成長にうつつをぬかし、弛緩しきった時代をもう一度見つめ直すチャンスがきている。生産力の向上により、貯めこみ余剰をもつ社会のみが強調されるのでなく、**心や思想などの多様性**が重視される歴史的変革のときであることを１万年前の遺跡は教えてくれる。

（遊行子）